

---

# 日本語の過去・現在・未来

## — 学生の研究テーマから見る変化 —

内海 敦子\*

私は主にインドネシアの少数民族言語を研究している。インドネシアは多言語国家で、700 前後の言語が話されているとされているが<sup>1)</sup>、活力があって老若男女が話している言語は数十程度ではないかと推察される。650 以上の言語については公的に言っても話者数が数十万以下である。私が調査対象としているような言語については数万以下の話者数しかおらず、実際に流暢に話せる人は数千人以下、その多くが高齢となっている。1960 年代以降に生まれた人々は公教育が相当整った 1970 年代以降に教育を受けているので、国家語たるインドネシア語を全く話せない人は非常に少ない。その世代の子ども達は 1980 年代あたりに生まれており、両親が家庭でもインドネシア語を使用するので当然インドネシア語が堪能となる。今は、さらにこの世代の子ども・孫世代が生まれているので、インドネシア語がますます多く使われるようになる。インドネシアで話されている少数民族の言語の多くは今世紀末まで生き残ることはできないだろう。

世界的にみると、インドネシアの状況が標準的である。普通は国の中にいくつもの言語が割拠しており、国家語と民族語のなわばり争いが見られ、大抵は国家語や標準語などの話者数の多い言語が少数言語を駆逐するダイナミックな変化のただ中にある。

日本語は、国家語でもあり、国民のほとんどが生まれながらに家庭で獲得する言語である。多くの国民が日本語だけが日本の言語だと信じている。インドネシアなどの多言語国家と比較するとシンプルな言語状況であり、かつ、日本語が今後廃れていくような懸念が生じない。他の多くの国と比較すると安定的に見えるかもしれない。

しかし日本も多くの言語状況の変化を経験している。最近数十年の日本においては他の国々と同様、多くの「言語」が消滅しかかるといふ状況になっている。まず、アイヌ語、琉球諸語の話者が激減し、消滅の危機に瀕している。それだけでなく日本語の地域方言が標準語の影響を受けて大きな変化をこうむり、伝統的な方言が急激に消滅していった。

幕末・明治維新のころは、地域が少し異なると全く言葉が通じないということも稀ではなかった。それから今日まで標準語がテレビなどの放送で用いられエンターテインメントの形で広められてきたことと、他地域で就職機会や学習機会を求めて移動するのが普通のことになって、出身地域が異なっても問題なく通じる標準語の習得が一般的となった。

私は 13 年ほど明星大学の日本文化学科で教えている。学生のレポートや卒業論文のテーマから、現在の日本語の姿が見えてくる。伝統的な地域方言の研究をしようとする学生はいるのだが、そもそも話者が高齢者であったり遠隔地で話されているなどの理由で直接調査をするのは難しい。従って、文献調査となるが、伝統的な地域方言であればおおむね 1980 年

---

\* 日本文化学科 教授 言語学

代ごろまでに調査されたものが中心となってしまいます。現在の地域方言の研究をしようとする、間違いなく「ネオ方言<sup>2)</sup>」「新方言<sup>3)</sup>」の問題に挑むことになる。ネオ方言は真田信治氏が提唱した概念で、標準語の影響を受けて変化を起こした新しい形の地域方言のことである。例えば、「できない」の意味では「デケヘン」あるいは「デキヒン」が用いられていた関西方言形（ケとへ、キとヒのように連続して同じ段（母音）の音が続くことに注目）が、標準語の「できない」の影響から「デキヘン」という形を許すようになったこと、「カケヘンダ」が「書かなかった」の影響を受けて「カカンカッタ」という形が多用されるようになったことなどが挙げられる。新方言は井上史雄氏の提唱した概念で、主に首都圏以外の他地域の方言が流入し、若い世代を中心にくだけた場で使う形式を指す。これらの概念を用いると、首都圏以外の出身者は自分の世代の「ネオ方言」を、首都圏の出身者は「新方言」の調査をすることが可能なのである。

方言特有の形が廃れる一方で、「方言コスプレ」を研究する学生も出てきた。これは田中ゆかり氏<sup>4)</sup>によると当該方言の話者でないものが、その方言から得られるステレオタイプのイメージを利用してコスプレのように使用することを指す用語である。首都圏のものがふざけたりツッコミを入れるときに「なんでやねん」などの関西弁を使用することなどが挙げられる。「方言コスプレ」の背後には、かつて標準語が正しい変種で地域方言が劣った変種であるという思い込みから自由になり、それぞれの方言の違いをおもしろい、楽しい、とポジティブにとらえられるようになった時代の変化がある。1970年代前後に方言調査をしていた研究者から聞いたことだが、地域方言の話者は必ずと言っていいほど「自分たちの言葉は汚いから」と調査時にことわるものだったそうだ（そしてその後に「だけど隣の地域の方言はもっと汚い」と続くことが多かったという）。今では地域方言の伝統的な形が廃れてしまう一方で、方言を地域のアイデンティティとして大切に思う気持ちが育ってきた。その現れの一つが方言コスプレであると言えよう。中学・高校が舞台であったり、同年代のキャラクターが多数出てくるアニメや漫画では、登場人物一人一人の個性を端的に表現するために「役割語」が多用されるが、方言使用者が登場することも多く、その中には当該方言の出身者でないのに使用しているまさに「方言コスプレ」の例が散見される。

上に出てきたが、金水敏が提唱した「役割語」<sup>5)</sup>はアニメ、漫画、文学作品など様々なジャンルの創造物において、人物像の性別・年齢・階級・地域などを強く連想させる語用のことである。これも学生の研究課題として人気である。現代の若者は一般的に、そして我が日本文化学科の学生はほぼ例外なく、マンガ、アニメ、ライトノベルを楽しんでいる。それらの作品に出てくるキャラクターの特徴を明確にするために様々な種類の役割語が用いられており、分析対象とすることで多くの発見があるからである。例えば女性が使う一人称の「ボク」は、一時期は利用者がそれなりにいたものの（1980年代に中学生生活を送った私の印象ではほぼゼロ、1990年代から2000年代にかけて中学生生活を送った学生たちの印象では一クラスに一人か二人）、現在はあまり見かけなくなった。しかし作品中にはしばしば「ボク」を一人称とする女性キャラクターが出てきており役割語の一種になっている。

「女性語」は特に女子学生に人気のテーマであるが、その使用の移り変わりに注目する研究が増えている。21世紀生まれの若者から見て明らかに数十年前の作品と現在とでは女性語の使用率が異なるからである。そして「女性語とは何か」という問題に突き当たらざるを

得ない。中村桃子の『「女ことば」はつくられる』<sup>6)</sup>に詳しいが、首都圏や関西圏の大都市の上層階級では「女性語」が何となく存在してきたものの多くの地域方言や労働者階級のことばには明確な「女性語」とされるものはなく、性別による語彙の違いや丁寧語の使用などについて異なる「傾向」が見られるだけである。これまで「女性語」が確たるものとして存在すると信じ込んできた学生が多いが、実際にアニメなどの作品中のキャラクターの言葉遣いを分析し始めると、書き起こした発話を見ているだけでは男女のどちらが話しているかわからない。学生たちが実際に行っている会話においても同様である。数十年前の作品に比べ、現在では実際の話し言葉の特徴がかなり忠実に再現されているのである。それで実際は多くの地域において従来も「女性語」があまり使用されていなかったことに気づく学生が多い。女性語の使用があまり見られない現在の状況を「日本語の中性化」などと呼ばれることもあるが<sup>7)</sup>、歴史的によく見てみると役割語としての「女性語」の使用頻度が低くなってきたというだけなのかもしれない。

ここ30年くらいで急速に使用が増えてきたのが、「打ち言葉」とも呼ばれる、話し言葉をかなり忠実に書く言葉遣いであり、学生の研究テーマにも登場する。一般にはあまり意識されていないが、書き言葉というのは教育されなければ獲得できない言語変種であり、話し言葉とは相当異なるものなのである。だから日本語が流暢に話せる小学校低学年の生徒が文法的にも正書法的にも「間違っ」文を大量に生産してしまうのである。Eメールが電子的なやり取りのほぼ全部だった1990年代までは、ある程度フォーマルな言葉遣いで正統的な書き言葉の使用が多かったので、「打ち言葉」は一部のインターネット上の掲示板などに見られるに過ぎなかったが、現在ではSNSの発達によって使用範囲と頻度が増えてきた。平成30年の文化審議会国語分科会において、コミュニケーションのために必要な言語知識として「打ち言葉」というものが報告されているくらいである<sup>8)</sup>。

日本語の移り変わりには社会情勢や文化の変化が存在する。これからも学生の研究テーマからそれを感じ取ることができるであろう。

#### 註

- 1) Ethnologue, Languages in Indonesia, <https://www.ethnologue.com/country/ID>
- 2) 真田信治、「ネオ方言の実体（地域方言と社会方言）」、『日本語学』18（13）、p.46-51、1999年、明治書院。
- 3) 井上史雄、「新しい日本語——《新方言》の分布と変化——」、『国語学』第144集、1986年。
- 4) 田中ゆかり、『方言コスプレの時代—ニセ関西弁から龍馬語まで—』、岩波書店、2011年。
- 5) 金水敏、『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』、岩波書店、2003年。
- 6) 中村桃子、『「女ことば」はつくられる』、ひつじ書房、2007年。
- 7) 小林美恵子、『『談話資料 日常生活のことば』にみる女性のことばの「中性化」』、『ことば』第41巻、現代日本語研究会、pp.3-20、2020年。
- 8) 文化庁「分かりあうための言語コミュニケーション（報告）について」（報道発表）、2018年、[https://www.bunka.go.jp/koho\\_hodo\\_oshirase/hodohappyo/\\_icsFiles/afieldfile/2018/04/09/a1401904\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/_icsFiles/afieldfile/2018/04/09/a1401904_01.pdf)